Osaka University Knowledge Archive

Title	日本近代文学における『聊斎志異』の受容 一近代作家を中心にして一
Author(s)	陳, 潮涯
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72429
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（陳　潮涯　）	
論文題名	日本近代文学における『聊斎志異』の受容 ―近代作家を中心にして―

論文内容の要旨

本論文は、明治から昭和戦後期までの日本における、中国怪奇小説集『聊斎志異』の受容史を踏まえながら、各時期における代表的な日本近代文学者を取り上げ、彼らの『聊斎志異』受容のあり方を分析した。日本近代文学がどのように中国古典文学を受け入れていたかという問題に着目することで、各時期の日本文学の特徴ないし一側面を見出だそうとしたものである。

第一章は国木田独歩の『聊斎志異』受容について考察した。国木田独歩は、『聊斎志異』を最初に現代日本語で訳した文学者であり、また彼の4篇の『聊斎志異』訳（「黒衣仙」（原題「竹青」）「舟の少女」（原題「王桂庵」）「石清虚」（原題と同じ）「姉と妹」（原題「胡四娘」）及び当時において最も多くの聊斎話を収録した『支那奇談集』（総計54篇の『聊斎志異』訳を収録）は、『聊斎志異』の普及に大きな役割を果たした訳書であった。その広まりというのは芥川龍之介も『支那奇談集』に目を通していたほどであった。独歩は、矢野龍渓を通じて『聊斎志異』を入手し、1903年から、自らが編集長を務めていた『東洋画報』上で、自身の『聊斎志異』訳を続々と発表した。『東洋画報』とは、題名が示すように写真、絵画、記事によって当時の東アジア情勢を紹介する雑誌であったが、アジアの珍聞や怪談も同時に掲載していた。独歩の『聊斎志異』翻訳は娯楽性が高い奇談として「讀むもの」の項目に収められていた。この時期、『聊斎志異』を含め、掲載された中国に関する図像や物語は少なくなかったが、その殆どが怪談奇聞と「支那」美人に関するものであった。このことから、日清戦争の戦勝国としての日本の異国趣味や「支那」を俯瞰しようとする視線がうかがえる。しかし一方で、独歩の『聊斎志異』訳には異国趣味を超越したところさえあった。独歩は当時主として注目されていた「艶情」をテーマとする聊斎話ではなく、むしろ幻想性に富んだ話の方に興味を寄せ、『聊斎志異』を西洋文学に対抗し得る、東洋幻想文学として評価していた。そしてその姿勢は彼の訳にも反映されており、話の大部分を簡略化しつつも、そこに内包された幻想的要素や場面のみを詳しく訳出している。独歩に見られる『聊斎志異』の幻想性に対する追求は、彼自身の創作「春の鳥」（「女学世界」第 4巻第 4号、1904年）にも反映されている。「春の鳥」は従来ワーズワースの詩作から生まれた作品考えられてきたが、『聊斎志異』の「竹青」（独歩はこれを「黒衣仙」という題名で訳した）との比較を通して、「春の鳥」に潜む東洋的な観念と浪漫性を確認することができた。それと同時に、「春の鳥」に見られる、「空想」を信じきれない深い絶望と、天地人生に対する問いといった名状しがたい哀感は、現実で不遇であった蒲松齢が『聊斎志異』の幻想話に託す「孤憤」と幾分相似していた。西洋文学の模倣ないし学習が主流となっていた明治時代において、独歩は自分の感性によって、『聊斎志異』の空想性と芸術性を見出だし、また東洋幻想に対して、西洋文学に対抗し得るもう一つの文学性ないし救済の道を求めていた。独歩以後、『聊斎志異』は誰でも楽しめる中国幻想物語の代表的な作品集へと変容し、日本人に中国文学趣味を伝えるものとなった。ゆえに、『聊斎志異』の日本受容の歴史の中で、独歩の功績は非常に大きいものであったと思われる。

第二章は芥川龍之介の二篇の『聊斎志異』翻案「酒虫」（1916年、『新思潮』第4号）と「諸城某甲」（1918年、『新潮』１月号）を中心に、彼の『聊斎志異』理解とその利用について考察した。芥川は、『聊斎志異』を創作題材の宝庫として利用し、さらに『聊斎志異』の話に新たな意味を与えた代表的な文学者である。しかし、芥川の『聊斎志異』理解と、彼がどのように『聊斎志異』を素材として利用したのかという問題とは完全に一致するわけではない。芥川の『聊斎志異』評論を見ると、芥川は人情深い妖精と人間の話に興味を抱いていた一方、『聊斎志異』に隠されている政治風刺の精神をも追求する傾向があったことがわかる。しかし、聊斎翻案の題材について、芥川は『聊斎志異』の典型的な話柄、つまり男女恋愛の題材には一切触れず、奇想天外な、短い話だけを素材としていた。『聊斎志異』をただ単に妖精と人間の男との恋愛話を集めたものだとはしないという点において、彼は国木田独歩の系譜を引いていたということができるだろう。しかし、独歩が幻想性、浪漫性に富む題材を好んだのに対して、芥川は「異史氏曰」が附されているような、より寓意性に富む奇聞怪談を好んでいた。彼は「異史氏曰」に創作意欲を呼び起こされたの

である。その結果、原典においてそれまであまり注目されてこなかったタイプの奇聞怪談は、芥川の翻案によって、「自己」や「我々自身」などといった近代的、普遍的問題を探求する作品へと変貌を遂げた。

第三章は、佐藤春夫の『聊斎志異』理解と翻訳について、特に児童向けの『聊斎志異』訳に注目することで考察した。佐藤春夫の聊斎愛好は彼の生涯を貫いており、また彼の『聊斎志異』に関する言説は、彼の各創作時期に散見される。佐藤春夫は当初、友人である芥川龍之介と同じように、『聊斎志異』の奇想天外な話に「詩興」をそそられた。そのため、佐藤春夫の聊斎志異愛好については、多くの先行研究で、佐藤の詩人としての浪漫性、美意識と関連させて論じられている。しかし昭和期に入ると、彼の中国文学理解の深化とともに、佐藤の聊斎趣味は、幻想性や物語性への追求から、徐々に表現方法と読者受けの問題へと転じていった。佐藤からすれば、『聊斎志異』の特色とは中国怪奇小説においてよく見られるようなその話柄ではなく、優れた文章表現に加え、それがさまざまな読者層にも受け入れられる要素をもっているということであった。こうした認識に従って『聊斎志異』を翻訳した結果、彼は自分の好みや「詩興」によるではなく、さまざまな読者層に対し、それぞれに相応しい聊斎話を選んで編集し、さらには西洋文学の表現をも借りることで『聊斎志異』の面白さを伝えようとした。このことから考えるに、佐藤春夫の翻訳は、通俗性を重視し、各読者層に配慮した訳であったと言うことができる。また、子ども向けの『支那童話集』は、佐藤春夫の編集上の配慮と翻訳の慎重さが最も反映された選訳書であった。『支那童話集』は大正末期からの児童文学運動と円本ブームの産物であるため、日本における最初の子供向けの『聊斎志異』翻訳ではなかったものの、佐藤春夫の編集と翻訳によって児童文学叢書のひとつとして人気を博し、新たな『聊斎志異』受容の流れを開いた。

第四章は太宰治の『聊斎志異』・「黄英」の翻案「清貧譚」（1941年、『新潮』1月号）と、「聊斎志異・竹青」の翻案「竹青—新曲聊斎志異—」（1945年、『文藝』4月号）について考察した。太宰治までの『聊斎志異』の受容史を鑑みると、『聊斎志異』のような中国古典文学は、常に西洋文学と対照をなすものとして文学者に利用されていたといえる。国木田独歩や佐藤春夫が聊斎話を多くの読者に紹介しようとしたことや、芥川龍之介が『聊斎志異』の形式と教訓性を自分の文学に取り込んだことは、西洋文学とは異なる様相を呈す中国古典文学に魅了された彼らが、『聊斎志異』の翻案と翻訳を実践の場とし、そこから多様な文学創造を試みていたことを示している。しかし太宰において、『聊斎志異』の受容のあり方は一変した。太宰治は『聊斎志異』の愛好者でも、中国文学に詳しい文学者でもなかった。彼は田中貢太郎訳、公田連太郎注解の『聊斎志異』（1926年、支那文学大観刊行会）だけを見て、『聊斎志異』原典は見ていなかったため、恐らくは『聊斎志異』に対して、不遇な書生が書いた弱い男の物語集という印象しか抱いていなかったのではないかと思われる。漢文知識に乏しく、外国文学を本格的に研究する意欲も持ち合わせていなかった太宰は、『聊斎志異』に対し、幻想、救済、教訓、表現方法などといった、今までの受容者たちが評価したような『聊斎志異』の特色を、一つも求めることはなかった。その結果太宰は、『聊斎志異』の「弱い男」の造形をパロディー化し、『聊斎志異』が元来そなえる文学世界を、完全に自分の文学に書き換えてしまった。戦時下の検閲制度と、植民地政策に協力する文壇状況とを鑑みれば、太宰の聊斎話の活用は、戦争に協力したくない彼が、ひそかに自分の思想を主張するための唯一の方法であったと考えられる。原作の教訓性を継承した上で、さらにそこに自身の解釈を付け加える芥川龍之介の『聊斎志異』翻案とは異なり、原作の主題を切り捨てる一方で、自身を明確に提示することはない太宰の「清貧譚」と「竹青」は、読者がこれらの話を様々に解釈することを可能とした。太宰の二篇の『聊斎志異』翻案が、日本における『聊斎志異』翻案の中で最も評価されるものであり、そして現在でもなお研究され続けているのには、こうしたことが理由として挙げられる。

また、本論は国木田、芥川、佐藤、太宰の4人の文学者を中心として彼らの『聊斎志異』受容を考察すると同時に、各人が使用したあるいは目を通した『聊斎志異』の版本についても考察した。田中訳、公田注の『聊斎志異』訳書を使った太宰治以外のほかの3人の文学者は『聊斎志異』の原典を見た上で翻訳ないし翻案を行っている。筆者の考察によれば、国木田独歩は『聊斎志異』の「王金範刻本」（1767年）を使って「竹青」と「王桂庵」を翻訳した後、「青柯亭刻本」（1766年）系統に属する『詳注聊齋志異圖詠』（1886年）をもって『支那奇談集』の編集行ったと考えられる。また、芥川龍之介は、おそらく1891年上海書局『詳注聊齋志異圖詠』（ないしはこの版本の復刻版）を使ったのではないかと推測することができる。この版本には注釈、評語と挿絵がある以外にも、巻首には清代文人が書いた序文、題詞、例言などといった中国古代知識人の『聊斎志異』の理解を示す文章が付されている。そのため、芥川は『聊斎志異』の教訓性にも興味を寄せたのではなかろうか。そして佐藤春夫は、呂湛恩注釈付きの『聊斎志異』（初版は1843年広州五雲楼による刻印）を底本としていたであろうことが推測できる。佐藤訳の「顔如玉」（原題「書痴」）に出てくる訳詩は、『聊斎志異』「書痴」の原文には存在しないが、呂湛恩の注釈においてあらわれる七言律詩「励学篇」（宋代、趙恒）と対応するからである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　陳潮涯　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	清水康次
	副 査	大阪大学　教授	中直一
	副 査	大阪大学　准教授	橋本順光
	副 査	大阪大学　名誉教授	高橋文治

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　日本近代文学における『聊斎志異』の受容
—近代作家を中心にして—

学位申請者　陳潮涯

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　清水康次
副査　大阪大学教授　中直一
副査　大阪大学准教授　橋本順光
副査　大阪大学名誉教授　高橋文治

【論文内容の要旨】

本論文は、日本近代文学における『聊斎志異』の受容について、国木田独歩・芥川龍之介・佐藤春夫・太宰治という作家たちの受容に焦点を当てながら、明治以降の日本語訳・翻案・改作などの全体像を浮かび上がらせていこうとするものである。なお、『聊斎志異』は、中国清代の蒲松齢が編集した、約500編の短編からなる、異類・怪奇・奇談を集めた伝奇小説集である。

本論文は、序と四つの章および結語からなるもので、分量は、400字詰原稿用紙に換算して約560枚である。

第一章は国木田独歩の『聊斎志異』受容についての考察である。独歩は、『聊斎志異』を本格的に日本語訳した最初の文学者であり、彼の四編の翻訳と、彼が編集した『支那奇談集』(総計54編の翻訳を収録）は、『聊斎志異』の普及に大きな役割を果たしたとする。論考の中で、独歩の入手した『聊斎志異』の版を追求し、翻訳を掲載した雑誌『東洋画報』について調査している。そして、「黒衣仙」（原話は「竹青」）・「舟の少女」（原話は「王桂庵」）などの翻訳を詳細に検討しながら、独歩の訳は、蒲松齢の社会批判の意図を汲まず、また、異類譚の艶情性に注目するのでもなく、幻想性に富んだ話として翻訳したことを明らかにしている。

また、独歩の創作「春の鳥」は、従来ワーズワースの詩の影響を受けて生まれた作品と捉えられてきたが、『聊斎志異』 の「竹青」からの影響を指摘し、東洋的な観念と浪漫性の伏在を主張している。

第二章は芥川龍之介の二編の『聊斎志異』からの翻案作品である「酒虫」（原話は「酒蟲」）と「首が落ちた話」（原話は「諸城某甲」）を中心に、彼の『聊斎志異』理解とその利用について考察している。芥川の『聊斎志異』についての評論からは、彼が怪奇譚や伝奇小説の全般に興味を抱いていたことがわかるが、創作では、寓意性を持つ話を用い、その不思議な話の持つ意味、すなわち教訓性や諷刺性を重視していると述べる。

第三章は、佐藤春夫の『聊斎志異』に対する理解と翻訳について調査し、考察している。春夫の『聊斎志異』愛好は彼の生涯を貫いており、その関心が変化していくとし、当初、奇想天外な話に詩興をそそられていた春夫が、次第に中国文学への理解を広げ、深化させていくさまを検証する。彼は、当時名訳とされた柴田天馬の訳文を批判し、『聊斎志異』のおもしろさと表現をわかりやすく伝えようとしたとする。特に、彼が子ども向けに編ん

だ『支那童話集』の翻訳について、読者への心くばりの中で、原話が大きく改変されるさまを浮かび上がらせている。そして、春夫は、広範な中国文学に対する理解を背景にして、新たな『聊斎志異』受容の流れを開いたとしている。

第四章は太宰治の「清貧譚」（原話は「黄英」）と「竹青―新曲聊斎志異―」（原話は「竹青」）について考察している。これまでの『聊斎志異』の受容は、西洋文学とは異なる東洋の独自性を持つものとして利用されていたのに対して、太宰は、原話の主人公像（特に不遇で弱い人物）を用いて、自己表現に代えようとしたとしている。彼は、『聊斎志異』の愛好者でも、中国文学に詳しい文学者でもなく、原話が元来持っていた文学世界を変形させ、自分の文学に書き換えてしまったと述べる。太宰が執筆した、戦時下の状況と、植民地政策に協力する文壇にも目を向けながら、太宰の利用は、彼が戦争協力をかわしながら、自分を主張するための方法であったとしている。

また、本論文は、それぞれの文学者が用いた『聊斎志異』の版本についても調査している。『聊斎志異』には、「青柯亭刻本」と「王金範刻本」という二つの系統の諸版があることに注目し、本文の比較を通じて、それぞれが参照した版を特定するという手続きを踏んで、考察を展開している。

【論文審査の結果の要旨】

『聊斎志異』は、日本の近代文学に大きな影響を与えた作品集でありながら、従来の研究においては、『聊斎志異』が典拠となっている個々の作品についての比較研究はなされてきたものの、それを、明治以降の近代文学の流れの中での受容として俯瞰的に追求した研究はきわめて少ない。したがって、受容の全体像を明らかにしようとした本論文の試みは高く評価される。また、日本での『聊斎志異』の受容に関して、二つの系統の版に言及した研究はなく、それぞれの文学者が参照した版を特定する手続きを踏んだことは画期的である。さらに、それぞれの論考が、中国と日本の数多くの文献を詳細に調査した上に成り立っていること、および、作品の読みと本文の比較が細部にまで目を向けた正確さを持っていることも高く評価される。

本論文の第一章から第四章の論考は、それぞれの文学者たちが持つ『聊斎志異』に対する関心と創作上での利用の仕方の特徴を浮かび上がらせている。『聊斎志異』そのものの持つ目的と意味を踏まえながら、日本での受容は、それを十分に理解したものではなく、また、個々の作家によって、その関心のありようが大きく異なっていたことを明瞭に示しえている。

とはいえ、いくつかの問題点も含んでいる。独歩の「春の鳥」に『聊斎志異』の影響を見る指摘には、十分な根拠が示されているとはいえない。芥川の場合には、『聊斎志異』への関心の持ち方と、創作の際の使い方の区別が十分とはいえない。太宰治の独自の使い方についても、もう一歩踏み込んで考える必要がある。同時代に広く読まれた柴田天馬の翻訳についてももう少し詳しく触れておくべきだっただろう。作家たちの理解と利用のありようの背後に、より大きな文脈（日本人が『聊斎志異』に対して感じた魅力の解明や、時代による状況の変化）を捉えてまとめなおせば、さらに優れた受容史になると思われる。

以上のような問題点は含んでいるものの、本論文が、日本の近代文学における『聊斎志異』の受容の全体像を明らかにするという展望のもとに、日本と中国の文献に対する詳細な調査と深い理解の上に成り立っていることは高く評価できる。

よって、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。